

都市と巷

出村 嘉史¹

¹正会員 工博 岐阜大学社会システム経営学環
(〒501-1193 岐阜市柳戸1-1, demura.yoshifumi.e8@f.gifu-u.ac.jp)

ものごとが出会う地点を巷（ちまた）という。その単純な概念が、都市の発生要因でもある重要な機能と同義である可能性に焦点をあてる。すなわち、ひと・もの・情報が交換されて、さらにはイノベーションを起こしやすい現場となり、常に新しいことが生まれる機能を抱え込む集合点こそが、巷である。互いに異質な各所からの動線が出会う広場、港の埠頭附近、駅前などが代表的な巷であり、各種の市場として機能しているならば、これを含むシステムのひとかたまりを都市と呼ぶことが考えられる。

キーワード: ちまた (巷・衢・岐), 都市形成史, 中心市街地, 市場, 広場, 駅前, 港

1. はじめに

都市には様々な機能があり、多様な視点で捉えられる点がまた都市のひとつの特徴でもある。それでも、その中核を占める主要な機能があるとすれば、それは何と考えるべきか。本発表では、都市を再定義する上で注目すべき「ちまた」という側面に焦点をあて、その視点による概念を整理することを目的とする。

2. 「巷」とは何か

原口¹⁾は、都市間競争のような限られた軸で優劣を競う都市の価値づけに違和感を示し、都市の奥行ある民衆世界の広がりや、「多様な出自をもつ民衆の長年にわたる実践の積み重ねのうえにこそ、成り立っている」「巷の社会性」に由来すると指摘する。ここで用いられる「巷」は、辞書²⁾によれば、3番目に意味に当たる。

ちまた【巷・岐・衢】〔「道股^{ちまた}」の意〕

- ①道の分かれる所。分かれ道。辻^{つじ}。
- ②物事の境目。分かれ目。「生死の—をさまよう」
- ③町中の道路。また、町中^{まちなか}。「紅灯の—」
- ④世間。世の中。「—の声」「不況の風が—に吹く」
- ⑤物事を行われる場所。「戦いの—」

すなわち、世間やまちの意味の前に、道の分かれるところ（道股）であったようだ。行く先が分岐する点は、同時に、互いに異質な各処から到達するひと・もの・情報が出会う場所でもある（図-1）。

一方で、古代の中国語においては、まちなかの小路を意味し、同時に漢方医術における氣の流れを表す³⁾。こちらを原義だとすれば、まちの往来、流通に焦点が当た

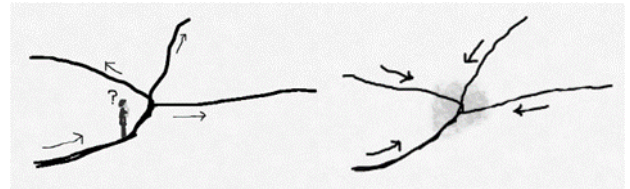


図-1 分岐点としての巷は同時に合流点になる

るこの言葉を、都市の周辺で発見される道の際立つ特徴としての分岐点を意味する言葉と同義に用い、先に確認した「ちまた」の語義が形成されたものと考えられる。それに伴い漢字表記に、「巷」の他に、街を意味する「衢」と同時に、分岐の「岐」が使われるようになるのは必然だろう。さらに、分岐や異なる属性の出会いであるという側面を理解すれば、水陸境界にあたる「港」がサンズイに「巷」で表現されることにも納得がいく。総じて、地域に広がるネットワークを前提に、その結節点の近傍のことを、改めて巷と定義することできるだろう。いくつかの漢字表記があるが、以下「巷」と記し、都市における巷の役割について考察したい。

3. 都市史における巷

同様の場所について、人類史とともに歩む都市史の中で、しばしばその存在を確認できる。

古代日本の都において、街道が集合する地点として「軽衢（かるのちまた）」や「海石榴市衢（つばいちのちまた）」をはじめ、複数の巷が存在し、市場の運営された場所であったことを白石⁴⁾が指摘している。同研究によると、複数回の遷都に関わらず、いくつかの巷は交

流拠点として持続して、都市の原型を形成したとされる。

増田⁵⁾によれば、11世紀以降、北海へ航路を通じるアルプス以北のヨーロッパにおいて、点在する諸都市の城壁の外にwik、port、フォブールと呼ばれた組織化された商人地区が形成された。これらも都市近傍で街道と結ばれる地点であった。そこに形成された新時代のコミュニティが、闘争を経て都市の封建領主を追放し、都市自治が始まった。この時、市民が誕生したと説明される。

都市成立の当初から広い圏域に亘る都市間交易が存在したことが考古学的調査から指摘されて久しい⁶⁾が、さらにメソポタミアからインダスの圏域に至るさらに広域なネットワークが明かにされつつある⁷⁸⁾。古代地中海諸都市の主要部分が広場（アゴラ、フォーラム）を有したことはよく知られており、これらが街道の終着点⁹⁾であることを考慮すれば、広場が交易に資する機能をもつことは必然だろう。ハンザ都市や周辺都市の旧市街地にある広場や一部のストリート名には、今も「markt」（市場）が用いられている。都市自治の始まりにおいて、広場を市場と同義と捉え、広場の獲得が商業発展のための悲願であったことが考えられる。

日本でも古代史以降、形やしくみを変化させながら巷が存在してきたことが予想されるが、近代に新たな市街地が形成される過程においても、巷的なものを如何に整えるのかが中心的な議論であったことは、例えば岐阜の新市街地の形成過程からも確認可能である¹⁰⁾。駅前の新市街地について、交易の場づくりを主要な課題として、そのための基盤づくりから始め、発展した。

4. 都市論としての可能性

都市史上把握できる巷には、水陸交通との結節点である港や川端、各方位から至る街道の延長線上にある広場や街路、近代以降には鉄道駅の駅前が挙げられる。他にも教会や社寺境内、公園や大学キャンパス、さらには大型ショッピングモールも含まれそうだが、全てを予測できない不羈で多様な出自のものが集まることによる予期せぬアウトプットを生じさせる機能の重要性と、その基盤について、合わせて考察する必要がある。

ジェイコブズは、都市の多様性はさらなる多様性を促し、多様な要素のかけあわせが既存のプロダクトを超えるモノを生み出す「輸入置換」の作用に着目した¹¹⁾。この作用に直接貢献するのが巷の存在であると考え、巷は都市に必要な不可欠な要素であると位置づけられる。

巷への信頼は、都市が、新しい産業やアイデアを継続的に生み出す可能性を意味する。集積の経済が、規模の競争に陥る場合には、寡頭大都市へ経済活動が集中する



図-2 各層に形成されるネットワークを貫く場所としての巷

結果から逃れられないが、グローバルシティ¹²⁾が相互に地域を飛び越えて連携するほか、そのサブシステムを適切に構築すれば、都市間ネットワークが巷でつながり、互いに独立しつつ連携する状況を構想することができる。

現在でも都市をとりまくネットワーク状の基盤がレイヤーをなしていると捉えられる（図-2）が、最下層の基盤も流通を支えていることが必然であり、最上位に存在する人的ネットワークに至るまでの諸相を貫く不動点として、巷が存在することが想定される。以上のことが真ならば、巷の健全化が、土木から建築に至る専門分化した各機能が互いに意識すべき共有項目となるだろう。

5. おわりに

本稿では、都市に関わる巷の重要性に着目して、仮説的に再定義を試みた。現状において、都市は人口で定義されることが多いが、巷の特性によって都市であるか否かが認められることが本質的ではないかと考えている。今後、多くのケーススタディによって巷論が洗練され、実証されるプロセスが必要である。

参考文献

- 1) 原口剛：「大阪的なもの」の所在一巷からの都市論へむけて一、季刊市政研究、No. 180、pp. 28-38、2013
- 2) 松村明：大辞林、電子版、三省堂編集所、2008
- 3) 古代汉语词典、商务印书馆、2002
- 4) 白石太一郎：古代の衝（ちまた）をめぐって、国立歴史民俗博物館研究報告、第67集、pp. 137-157、1996
- 5) 増田四郎『都市』ちくま学芸文庫、2007
- 6) Mellaat J: Earliest Civilizations of the Near East, McGraw-Hill, 1965
- 7) 長田俊樹『インダス 南アジア基層世界を探る（環境人間学と地域）』京都大学学術出版会、2013
- 8) Gangal K, Sarson GR, Shukurov A : The Near-Eastern Roots of the Neolithic in South Asia, PLoS ONE 9(5): e95714, 2014
- 9) Benevolo L : 都市の世界史1 古代、相模書房、2001
- 10) 出村嘉史：近代岐阜の「市区改正」とその運営、日本建築学会計画系論文集、77巻、677号、pp. 1643-1652、2012
- 11) Jacobs J: The Economy of Cities, Vintage, 1970
- 12) Sassen S : The Global City: New York, London, Tokyo, Princeton University Press, 1991